

場所を間違ったかも

関西大学 社会安全研究センター 小澤 守

4月1日のこと、アスファルトの道を歩いていた時、目の前にアゲハが1頭休んでいた。休んでいたのかどうかはともかく筆者にはそのように思えた。そのまま放置しておいてもよかったのだが、車の走る道路上である。飛び立つように追ってはみたが、少しばかり移動しただけでまた地面におりてしまった。羽根はすっかり出来上がっているが、さなぎから脱皮してすぐだったようでしばらくたたないと十分に活動できないのではないかと思った次第である。あたりには餌になる花も一休みをする木もなく、まさしくアスファルトの上である。下手に触ると羽根を傷つけることにもなる。頑張れよと声をかけてその場を離れるしかなかった。不幸なことに、先代によって車の行き交う町のど真ん中に卵を産みつけられたのか、少なくともこのアゲハ本人の責任ではないと思うが、産卵は場所を選ばないととんでもないことになるのである。

同じような事例を思い出した。今をさる十数年前、筆者の実家の隣の田んぼの脇に植えていた金木犀の枝に、天然記念物でもあるモリアオガエルが大きな泡状の卵を産みつけたことがあった。それまでは近所のため池に覆いかぶさるように広がっている木々の枝に産卵していたのだが、休耕田が広がり、ため池は周囲から流れ込んだ土砂でほぼ埋まってしまっていた。オタマジャクシが生息できる状況ではなかったことをモリアオガエルがどうやって理解したのか、聞くこともできないが、ともかく家の庭先の卵が無事成長できるようにしなければならぬ。くだんの田んぼは長らく稲田として利用してはいなかったが、たまたま実家に戻っていた兄と二人して卵の下に小さなため池を作り、オタマジャクシが生育できるようにしつらえた。それに味をしめたのか、以来毎年モリアオガエルが産卵するようになったので、当方にもそれに備えて彼らの生活環境整備が必須になったのである。

たまたま卵を見つけたからいいようなものであるが、もし発見していなかったら、我が家の庭先でモリアオガエルが絶滅したかもしれない。ただ現状、実家へは、我々兄弟が風を入れるため定期的に出向いているので、時期が来たらオタマジャクシの世話をすることができるが、早晚二人とも実家に帰ることができなくなるだろう。数年かけて卵の移設をすればよいのかもしれないが、近隣に確実に水が確保できる手ごろなため池も見当たらない。結果的に天然記念物でもあるモリアオガエルの絶滅に手を貸してしまうことにならないかと危惧している。

時と場所の選定は何もアゲハやモリアオガエルに限らず重要なのであるが、それらの選定には自ら関与できない場合が多い。災害との遭遇もその一例である。予期せぬ事態に立ち至ったとき、わが身一つであれば自ら判断して行動すればよい。家族や友人と一緒にあれば連絡を取り合い、場合によっては集合して行動することが必要になろう。こうした場合でも、最近ならばみなスマートフォンを持っていて、いつでも連絡が取れるから問題ないと考えるだろう。特にスマホ世代はそうであろうが、それが極めて危険な状況であるという実感が彼らにほとんどないことに大きな懸念がある。あの東日本大震災から既に10余年が経つ

ことを思えば仕方がないのかもしれないが、大規模な災害が発生すれば極めて多数の人がほぼ同時に連絡を取るようになり、たとえ基地局が損害を受けていなくても、スマホは機能しなくなる、つまりアクセスが殺到して処理能力を超えるのである。

このような場合にはスマホを前提としない昔からの方法が最もよく機能する。つまり大きな異変に備えて、あらかじめ集合場所を取り決めておき、実際に起こった際にはすかさずその集合すること、それができない時には自ら判断して行動することを約束しておくことが必須と思う。我々はアゲハやカエルと違ってかなり広範囲に状況を観察し、かつまた地図を見ることも可能なのである。自らが行動する場所のおおよその地図が頭に入っておれば、ベストとまでいかなくてもベターな解が得られるだろう。先のアゲハの場合には生まれてすぐで、全体を見ることも自らの状況の判断もできない状態であったと思う。これが彼女の悲劇に繋がっていなければいいのだが。ちなみに、資料によれば筆者が遭遇したのは春型のナミアゲハだそうで、季節は大きくずれてはいないとのこと。ただ場所が悪かった。

